

言葉に対する捉え方を更新していく授業の創造
～ 問いを生み出し、考えを深める学びを通して ～

平井 規夫 富高 勇樹 松本 千晶

1 主題設定の理由

3年研究の2年次となる今年度、本校国語科では教科の研究主題として「言葉に対する捉え方を更新していく授業の創造」とした。

昨年度は1年次として「言語感覚を働かせ、論理的に考える力の育成」を国語科の主題とし、研究を行ってきた。その中で、授業を創造していくなかで、「学習課題」、「言語活動」、「交流」の三点を工夫をすることで、言葉による見方・考え方を働かせることに一定の成果がみられた。生徒の学びに向かう姿勢を高め、主体的に授業へ参加するための一つの手立てとして、先述した三点の工夫は今年度も引き続き授業創造の要素として取り入れていく。

昨年度の成果に加えて、今年度は「生徒の学習前後の変容をどのように見とるのか」という点を意識した研究を行っていく。学習前後の変容というと、学習前と後の比較となるが、ここでは学習過程の中でどのような変容が見られるのか、またそれを教師が見取るにはどのような手立てが必要となるのかということを考えていきたい。

今年度の研究を進めていく上では、昨年度の研究だけでなくこれまでの本校国語科の研究も基に進めていく。本校国語科は2014年度から2016年度まで、「協働的な探究を促す授業の創造 ～自分の考えを再構成する力の育成をめざして～」を研究主題に設定し研究を行ってきた。この研究主題はそれまで本校国語科で積み上げてきた研究と密接に関わっており、「自分の考えを再構成する力」の育成に取り組んできたものである。

昨年度までの研究を振り返ると、まず生徒が自分自身で考えたことを絶対化しないで、考え直すことの難しさからはじまる。生徒は課題に直面したときに、試行錯誤しながら自分なりの解答や表現を導き出したり、理解の状態に達したりする。その一応の解決に満足し、その解答や表現、理解の状態をより高次なものとしていくとすることは難しい。そこで、新たな発見や疑問が生じることで「自分の考え」をもう一度考え直すことにつながると考えた。その際、「協働」と「探究」という2つの要素が生徒のさらなる考えの深まりに必要であると考え研究してきた。

上記の「協働」について、高垣(2010)では以下のように述べている。

鹿毛雅治は「協働」という語について、『一人ひとりの異質性（他者性）に基づいた対話的コミュニケーションによる多様な学びの成立について強調したいので、「共同」や「協同」ではなく、あえて「協働」の語を用いた。』としている。本研究でも他者を価値観や考えを異にする人と捉え、他者との対話による学びの深化を目指すため、鹿毛に倣い、「協働」という語を用いた。

本校国語科では、先述したように異なる考えをもつ様々な人とのやり取りの中から新たな考えを主体的に生むことの必要性について考えている。そこには他者との対話的コミュニケーションは必要不可欠なものであり、多様性に気づく中で自分自身の考えを深めるための要素として「協働」が必要であると考え研究を進めてきた。

一昨年度までの研究の中で、深く考える授業に必要なものとして「視点を変える活動」を各教科で設定した。具体的な「視点を変える活動」の中身として、仲間との関わり、資料提示や学習課題など教師の働きかけ、振り返りなどが挙げられる。本校国語科においては「対話」と「振り返り」を生徒に促すことで、「協働」的な授業や「探究」的な授業の創造に取り組んできた。

「対話」を促すために、自分の考えたことを他者に積極的に発信できる、様々な交流形態を取り入れた。また、「振り返り」については、学習感想のような学習後の場面だけでなく、学習過程の中で振り返ることができるよう、考えの可視化ができるような記録（ノート指導、初読の感想と学習後の感想を並べる記述、ポートフォリオ等）を取り入れている。

授業実践に取り組む中で、「話す」「聞く」「書く」「読む」これらのどの領域においても、国語科で養ってきた見方や考え方を使いながら、他者との対話を通して、「自分なりの結論」を吟味したり、改善したり、発展させ、より深く考えることへつなげることにつながっていくという成果が表れた。一方で、次の学習への意欲や交流活動における他者への寛容な態度、学習で身につけた力が今後どのような形で使うことができるかという点について可視化の難しい点も課題として挙げられた。

これらの積み重ねから、さらに知識・技能を伸ばし、主体的に学びに向かう姿勢を高め、思考・判断・表現する力の高まりをすべての生徒、また教師が実感できるような授業の創造を今年度の国語科研究主題としていく。

【 言葉に対する捉え方を更新する 】

2017年6月に文部科学省から発表された、次期「学習指導要領解説（国語科）」（以下 解説）において、教科の目標が以下のように示されている。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

（下線部は本校国語科によるもの）

解説の中では、国語において育成を目指す資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」とし、国語で理解し表現する言語能力を育成する教科であることを示している。

また、答申別紙において言語能力を構成する資質・能力を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に沿って整理したものとして、以下のように示している。

（知識・技能）

言葉の働きや役割に関する理解、言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け、言葉の使い方に関する理解と使い分け、言語文化に関する理解、既有知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）に関する理解が挙げられる。

特に、「言葉の働きや役割に関する理解」は、自分が用いる言葉に対するメタ認知に関わることであり、言語能力を向上する上で重要な要素である。

（思考力・判断力・表現力等）

テキスト（情報）を理解したり、文章や発話により表現したりするための力として、情報を多面的・多角的に精査し構造化する力、言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力、言葉を通じて伝え合う力、構成・表現形式を評価する力、考えを形成し深める力が挙げられる。

（学びに向かう力・人間性等）

言葉を通じて、社会や文化を創造しようとする態度、自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態

度、集団としての考えを発展・深化させようとする態度、心を豊かにしようとする態度、自己や他者を尊重しようとする態度、自分の感情をコントロールして学びに向かう態度、言語文化の担い手としての自覚が挙げられる。

言語能力を構成する資質・能力が働く過程として、①テキスト（情報）を理解するための力が「認識から思考へ」という過程の中で、②文章や発話により表現するための力が「思考から表現へ」という過程の中で働いている。これらの「認識」から「思考」を経て「表現」へという学習の過程は、決して一方向的だけでなく、双方向的に働くことで言語能力の資質・能力を高めることへとつながるものと考えられる。

解説に示されている国語科の目標を概観すると、全学年の目標に「社会生活」という言葉が示されている。その中で、第1学年の目標では「日常生活」という言葉が挙げられている。これは小学校国語科で学んできたことを基に、系統的に学習が繋がっていることが示唆されている。加えて、小学校中学校で育成されたことが高等学校の国語科の基礎となる。中学校段階においては、生徒は「社会生活」を見据えながら、様々な事象や課題に向き合い、言葉を通して理解し、解決していくことができる力が求められていると考えられる。

生徒が、①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識及び技能」）②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」）③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」）を常に意識できるような言語活動や学習課題の設定が、資質・能力の向上につながるものであると考える。そこには教科を学ぶ本質的な意義の中核として「見方・考え方」を自由に働かせることができることも併せて必要なものとなる。

生徒はもちろん私たちは言葉により、互いの考えや意志、感情を伝え合うことで思考や認識を再構成し確かなものとしている。現代の情報化社会においては性別・年代を問わず、情報を発信するための機会や方法が数多く存在している。情報の中で主要な要素を占めている言葉の役割は今後一層大きなものとなっていくと考えられる。

そこで、言葉を正確に理解し、適切で効果的な表現を行うことのできる力の育成が必要となる。そこには、知識・技能の習得だけでなく、他者との対話や、そこに互いの生きた考えを交差させることのできる、いわばコミュニケーション能力も必要とされる。生徒自身が言葉と意識的に関わりながら、自他の考えを吟味したり評価したりする中で、自分の認識として理解したことをもう一度客観的に見つめなおしていく、そのような機会を意図的に作り出す授業の創造について研究していく。

授業を行う中で、自分の考えている認識と違う認識をもつ他者との関わりを通して、答えや新たな知識を創り出す上で、自分とは違う存在である他者とのように互いの考えを響き合わせるかが問題となる。また、自分自身の考えや意見を絶対化しないためのメタ認知能力も必要となる。

生徒が授業の中で互いの考えや意見を納得、譲歩するには相手意識をもち適切に表現すること、また批判的な思考をもって理解していくことが求められる。そこで、生徒自身が自分自身の考えを述べる際、判断の根拠や理由を明確にすることを学習活動に積極的に取り入れる。そして考えを更新するきっかけを逃さないよう、学習過程の見取りを、生徒も教師も効果的に行える手立てについても考えていく。

2 全体研究との関わり

本校では「新たな世界を主体的に創造する生徒の育成～「見方・考え方」を働かせた学びを通して～」を全体研究の主題とし、3年間の研究を行う。初年度である昨年度は、新学習指導要領への意向を見据え、「教科の見方・考え方を生かした学び」について各教科で研究を進めてきた。

初年度の成果として、言葉による見方・考え方をより明確に働かせるため、「生徒の実態に即した学習課題の設定」や「言語活動の工夫」をさらに推し進めることが必要と考え授業を創造してきた。この点は国語科の授業創造の上で重要な要素として今年度も取り入れていく。

また、言葉による見方・考え方を働かせた学びに必要な手立てとして、生徒自らが言葉を通して自分の考えを表出したり、他の考えに触れることで内化することで自分の考えをより深め、広げる過程が思考・判断・表現する力を身に付ける上で必要なことと捉え授業を創造してきた。生徒が常に課題意識をもち学習に取り組むことで、学びへの主体性を養うことにもつながる。

「言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象と」する国語科では、言葉と意識的に生徒が関わりながら学習課題を解決することで、生徒が自らの考えの変容に気付き明確になることで学びの有用性を認識することが可能となる。また他者との関わりが自分の考えにどのような影響を与えているのかということにも意識を向けることで、考えの異なる他者を受け入れる寛容な心の育成にもつながると考える。そのためには、適切な学習課題と言語活動の工夫が必要となる。教師主導から生徒主導の授業形態とすることで、生徒が主体的に課題を解決し、その際「言葉による見方・考え方」をより意識的に働かせることにつながると考え、授業を創造してきた。

2年次となる今年度は、「見方・考え方」を働かせた学びの評価の方法や在り方について、研究を深めていく。

3 研究内容

研究2年次となる今年度は、昨年度の研究成果でもある「見方・考え方」を働かせた学びを見とるための手立てについて研究を進めていく。重点としては以下の二点を研究の中心としていく。

(1) 生徒の学習調整を促す形成的評価の工夫

全体総論でも触れている、学習評価の一つである「形成的評価」についての考え方を本校国語科では、「学習過程を生徒が客観的に評価できる力」と定義していく。

自分自身を客観的に評価するという事は、自分自身の変化の過程を見つめられるという状況を作り出すことが必要となる。学習の過程において、「わかったこと」「できた（できるようになった）こと」を表出できる手立てを意図的に仕組んでいく。また、それが教師にとっては生徒個々の習得したことや活用できるようになったことなど、目指す言語能力に対してどのような位置に生徒がいるのかという点を把握する一つの具体となると考える。

見とる手立てとして、ノート指導の在り方やOPPを用いての学習を生徒自身が振り返ることができる機会を意図的に設定する。その中で生徒は、「何がわからない」や「何ができない」といった自分の中にあるものを探ることに加え、「〇〇がわからないから△△に困る」や「〇〇ができないから△△がより良くできない」などより高次の知識・技能、表現へ注目することとなり、学びに対する姿勢を高めていくことにつながるであろう。

そこで今年度の研究の一つの手法として、生徒の記述する媒体の工夫や、記録したことを見とる中身の設定、また、その評価が生徒にとって次の学びにどのように生きるのかという点について検討していきたい。

(2) 身につけさせたい資質・能力を可視化するための工夫

先述の通り、(1)の生徒自身が自分の学習過程を客観的に評価するために、ノート指導やOPPを日頃の授業から意識的に取り入れていく。生徒にとって自分自身の立ち位置を見極めるために用いた評価と同時に、教師が生徒個々の学びの度合いや深まりを見とる手段としてどのようなことが有効であるかという点について、研究の中心の一つとして据えていく。また単元の終わりには、それまでの客観的な生徒の自己モニターを用いて学習前後の比較としてどのようなことを生徒が表出していくのかという点についても研究を進めていく。

教師による一方的な発信を受けた授業でなく、生徒が自ら課題意識をもち主体的に学習に取り組んだ後に、生徒自身がどのような学習過程や論理操作を行い学習を振り返るのかという点を検討していきたい。

4 研究を支える取り組み

(1) 単元構想表

これまで本校国語科においては「単元構想表」を基に指導計画を立ててきた。「単元構想表」を用いることにより活動の流れが明確になるとともに、課題をどの段階で、どのような流れで設定していくことが望ましいのかについて考えることができる。また生徒にどのような知識・技能を指導し、それらをどのように活用させていくかという流れを見とることに有効であるため、指導計画を立案する際に活用していきたい。

(2) FUZOKUワークシート、語彙の拡充シート

言語感覚を働かせることの有用性を生徒が感じるため、また意識的に言葉と関わる態度を育てるために、言葉の価値や実生活における有用感に気付かせるところから始めるため、本校では「FUZOKUワークシート」の作成と活用に取り組んできた。学校における授業のみでなく社会的な事象と自分自身の考えを交差させる場面を作ることで、より豊かな言語感覚を養うことにつながると考える。

新聞記事に対し、自分自身の意見や考えを外化し、それを他者と交流することで考えを深めることや広げると考える。また、FUZOKUワークシートを使い、1年では自分自身の気づきの発表、2年では他者の気づきに対しての気づき(感想・比較・疑問・意見・批判等)を小グループで考える、3年では2年生で培った力を用いた上で、気づきの提示の仕方においての工夫、その場で質問や応答を通し全体で一つの事象に対する考えの深まりや広がりをもたらし交流を取り入れている。

そして、全学年で共通した語彙の拡充シートの活用に取り組んでいる。生徒が文章や会話、日常の中にある言葉の中から自分の気になる語や知っておきたい語について、その意味や他の言葉との関連性などを考えながら語彙を広げていくことを目指したシートを活用している。新たに獲得した言葉の意味や実際の使用場面などを考えていくことで語彙の広がりや深まりを促していくものと考えている。

(3) 思考の可視化・ノート作り

生徒が気づいたことや考えたこと、理解したことなどを可視化することで情報の整理につながる。また生徒の記述の意識が高まるだけでなく教師が評価材として生徒の見取りを行う際にも有効である。生徒が記述することで考えが深まると実感できる工夫をさらに積み重ねていきたい。

可視化の具体として以下のような取り組みを行った。

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| ○ ツールミンモデル … 論理構成の分析 | ○ 三角ロジック … 論理構成の分析 |
| ○ マインドマップ … 思考の表面化 | ○ 一枚ポートフォリオ … 思考の変容の見取り |
| ○ マンダラート … 発想の広がり | ○ 学習感想の集積 |

(4) 交流形態の工夫

自分の考えを深めたり広げたりする一つの学習過程として「交流」を行う。これまでの学習過程の中でも小グループによる意見交換の有用性は周知されているところである。しかし、それが意見発表のみで終わってしまい、他者を承認する要素が強い。深みや広がりをもった交流とするため、ファシリテーション(facilitation: 集団による知的相互作用を促進する働き)や国語科で積極的に取り入れてきたワールド・カフェなどの考えを用い、他者の意見や考えに対する発見の驚きや衝突(否定でなく吟味)を促すような効果的な交流の在り方について今後も実践に取り組みたい。

【 引用・参考文献 】

- 有本秀文 2010 ブッククラブ実践入門 明治図書
井上尚美 1989 言語論理教育入門 明治図書
井上尚美 2007 思考力育成への方略—メタ認知・自己学習・言語論理—(増補版) 明治図書
岩永正史 2000 言語論理教育の探究 井上尚美編 東京書籍
大西道雄 2009 国語教育指導用語辞典(第4版) 田近旬一・井上尚美編 教育出版
中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方

策等について(答申)」 2016. 12

中央教育審議会初等中等教育課程部会 国語ワーキンググループにおける取りまとめ 2016. 5

文部科学省 中学校学習指導要領解説 国語編 2008

文部科学省 中学校学習指導要領解説 第1章 総説, 第2章 国語科の目標及び内容 2017

山梨大学教育人間科学部附属中学校 研究紀要 2011 - 2015

山梨大学教育学部附属中学校 研究紀要 2016 - 2017